

全国大学書道学会 第66回 令和6年度（福岡）大会 開催要項（第2次案内）

下記の要領で、全国大学書道学会 令和6年度（福岡）大会を開催します。ふるってご参加いただきたく、ご案内申し上げます。

- 1) 主 催 全国大学書道学会
- 2) 開催大学 福岡教育大学
- 3) 開催日 令和6（2024）年9月21日（土）
- 4) 大会会場 福岡教育大学教育学部 〒811-4148 福岡県宗像市赤間文教町1-1
- 5) 参加費 3,000円 *準会員（大学院生）は2,000円 当日受付にお持ちください。

6) 参加申込

下記フォームより9月13日（金）12:00までに事前申し込みをお願いします。
所属と氏名を書いた名札を名札ケース（各自ご用意ください）に入れてお持ちください。

[大会参加登録用 Google フォーム]

<https://forms.gle/g1gY9kNL6LRHAFtr8>

必ず事前のお申し込みをお願いいたします。9月13日（金）12:00まで



※入力された情報は本大会の運営にのみ使用いたします。

※フォームのお申込みが難しい場合、開催大学までメールもしくはFAX・はがきにて次の情報をお送りください。

- ・大会／懇親会の参加ご希望の旨、ご氏名、ご所属、メールアドレス、連絡がとれる電話番号。

こちらのQRコード
からも読み取れます

7) 日 程

● 9:00 受 付（会場 107 教室前）

● 9:30 ~ 10:20 開会式・総会（特I教室）

1. 開会のことば

2. 開催大学あいさつ

福岡教育大学 和田 圭壮 先生

2. 会長あいさつ

横田 恭三（跡見学園女子大学）

3. 理事長あいさつ

永由 徳夫（群馬大学）

* 議長選出

[] ()

4. 議事

（審議事項）

1) 令和5年度事業報告

杉山 勇人（鎌倉女子大学）

2) 令和5年度決算報告

尾川 明穂（筑波大学）

3) 令和5年度監査報告

中村 史朗（滋賀大学）

- | | |
|------------------------------|---------------|
| 4) 令和6年度事業計画(案) | 杉山 勇人(鎌倉女子大学) |
| 5) 令和6年度予算(案) | 尾川 明穂(筑波大学) |
| 6) 国際学術交流専門委員会について
(報告事項) | 下田 章平(相模女子大学) |
| 1) [会員・準会員に関する規程] 改定 | 永由 徳夫(群馬大学) |
| 2) [学会賞に関する規程] 設置 | 永由 徳夫(群馬大学) |
| 3) 『大学書道研究』第17号について | 角田 勝久(新潟大学) |
| 4) 『大学書道研究』の各種規程の新設・改定 | 下田 章平(相模女子大学) |
| 5) その他 | |

5. その他

- 1) 新入会員紹介
- 2) 次年度開催大学あいさつ
- 3) その他

[] ()
事務局

6. 閉会のことば

●10:30~11:50 研究発表／午前の部 第1分科会(会場 特I教室) 司会 角田 勝久(新潟大学)

10:30~11:00 研究発表 午前1-①

書表現セラピーの理論と展望
—芸術療法を起点として—

四国大学大学院文学研究科 高嶋 良子

11:05~11:35 研究発表 午前1-②

昭和初期における上田桑鳩の芸術論と術語解釈

東京藝術大学専門研究員 柳田 さやか

11:40~12:10 研究発表 午前1-③

「小島切齋宮女御集」の配列について

書文化研究会会員 染谷 慶子

●10:30~11:50 研究発表／午前の部 第2分科会(会場 特II教室) 司会 尾川 明穂(筑波大学)

10:30~11:00 研究発表 午前2-①

王鐸の臨帖における脱字の発生傾向と要因に関する研究

東京学芸大学教職大学院 阿部 ゆう

11:05~11:35 研究発表 午前2-②

歴史家・陳垣の書道に対する所見の考察
—書作の態度と北京における立ち位置について—

相模女子大学非常勤講師 早川 桂央

11:40~12:10 研究発表 午前2-③

蘭亭序神龍半印本の再検討
—破筆などから推測する空野の存在—

四国大学大学院文学研究科 馮 琳凱
四国大学書道文化学科教授 太田 剛

●12:10~13:10 休憩(60分)

●13:10~14:30 研究発表／午後の部 第1分科会 (会場 特I教室) 司会 山口 恭子 (法政大学)

13:10~13:40 研究発表 午後1-④

博文堂関連書簡に見る山本二峯の収蔵活動について

相模女子大学准教授 下田 章平

13:45~14:15 研究発表 午後1-⑤

日本中世における年中行事「書き初め」の成立過程

鎌倉女子大学短期大学部教授 杉山 勇人

14:20~14:50 研究発表 午後1-⑥

近代における「撥鑑法」に対する解釈の変容

群馬大学教授 永由 徳夫

●13:10~14:30 研究発表／午後の部 第2分科会 (会場 特II教室) 司会 草津 祐介 (東京学芸大学)

13:10~13:40 研究発表 午後2-④

「童」字に関する考察

～珍簋銘文中の「童」字を例として～

九州女子大学准教授 古木 誠彦

13:45~14:15 研究発表 午後2-⑤

書画同源より鑑みる陰陽二元論

高野山大学文学部密教学科教授 野田 悟

●14:50 ~ 15:00 休憩 (10分)

●15:00 ~ 16:20 大会記念講演 (会場 特I教室)

司会：藤森 大雅 (大東文化大学)

演題：呉昌碩のまなざし—最後の文人と師友たち—

講師：九州国立博物館長 富田 淳 先生

—とみた じゅん

1960年茨城県生まれ。筑波大学大学院博士課程単位取得中退。1990年、東京国立博物館研究員となり、学芸研究部長、学芸企画部長、九州国立博物館副館長、東京国立博物館副館長などを経て、現職、九州国立博物館長。

その間、特別展「北京故宫博物院200選」(2012)、特別展「書聖 王羲之」(2013)、特別展「台北故宫博物院 神品至宝」(2014)、特別展「顔真卿—王羲之を超えた名筆—」(2019)、連携企画20周年「王羲之と蘭亭序」(2023)、連携企画「生誕180年記念 呉昌碩の世界」(2024)など多くの特別展・企画展に携わった。『もっと知りたい中国の美術』(2022 東京美術)、『別冊太陽 王羲之と顔真卿』(2019 平凡社)ほか著書、講演多数。

●16:30 閉 会 閉会のことば

8) 学会誌への投稿

- ・ 学術局では、『大学書道研究』の内容充実と査読の公正化、投稿論文の質的向上を計るために、『大学書道研究』の投稿規程を新設し、執筆要領の改訂を進めております。
- ・ 新しい投稿規程・執筆要領に関しましては、本年度総会にて報告の後、本学会ホームページに掲載いたします。ご確認の上、原稿をご投稿頂きますよう、よろしく申し上げます。

9) 会員書作展

会員作品展を以下のように開催いたします。ふるってご参観ください。

※本年度の会員書作展の作品は、福岡大会（2024年9月）での展示の後、台湾との学术交流・書作展（2025年3月予定）にも展示いたします。

- (1) 会 期 令和6年9月20日（金）～9月22日（日）9:00～18:00（最終日は17:00まで）
- (2) 会 場 福岡教育大学 学生会館内大集会室
住所 〒811-4148 福岡県宗像市赤間文教町1-1
- (3) 特別展示 福岡教育大学書道専攻収蔵 王鐸・楊守敬・羅振玉等の作品も展示します。

10) 理事会【オンライン開催】

日 時 9月15日（日） 19:00～20:30 ※理事の皆様には別途ご連絡いたします。

11) 三学会合同懇親会

三学会合同の懇親会を開催いたします。ふるってご参加ください。

日 時 9月21日（土） 17:00～19:00

場 所 福岡教育大学学生会館内ルーチェ食堂

会 費 会員 5,000 円 準会員（大学院生） 4,000 円

12) 大会会場への交通・宿泊・昼食について

- 〈交 通〉 ❖JR 小倉駅からの場合…鹿児島本線下り博多方面普通電車に乗車（約45分）
または、特急・快速に乗車し、黒崎、折尾駅で普通電車に乗り換え（約35分～40分）
→教育大前駅下車、徒歩（約10分）
- ❖JR 博多駅からの場合…鹿児島本線上り小倉方面普通電車に乗車（約50分）
または、特急・快速に乗車し、赤間駅で普通電車に乗り換え（約30分～40分）
→教育大前駅下車、徒歩（約10分）
- ※特急電車の場合、赤間駅を通過する場合がありますので、ご注意ください。

〈宿泊・昼食〉各自ご手配願います。近隣には食堂・レストラン等はありません。駅前にコンビニがあります。

13) 緊急時における対応について

緊急時（感染拡大・災害等）は、開催校との協議により大会を中止することがあります。その場合は、開催日前日の19:00までに全国大学書道学会ホームページ（<http://all-shodo.jp/>）にてお知らせいたします。

【お問合せ】 ・研究発表、学会に関するお問い合わせ

全国大学書道学会事務局（杉山勇人／鎌倉女子大学／sgym-hyt@kamakura-u.ac.jp／0467-33-8211）

・大会に関するお問い合わせ

開催大学担当（和田圭壮／福岡教育大学／E-mail：wadakei@fukuoka-edu.ac.jp／0940-35-1427）

本学会と併せて、下記の学会等が開催されます。（参加費はそれぞれに必要です）

*9月20日（金） 13:00～16:30 日本教育大学協会全国書道教育部門

*9月22日（日） 9:30～16:10 全国大学書写書道教育学会

アクセスマップ

【大会：福岡教育大学教育学部】



❖JR 小倉駅からの場合
 鹿児島本線下り博多方面普通電車に乗車
 (約45分)
 または、特急・快速に乗車し、黒崎、折尾駅
 で普通電車に乗り換え(約35分~40分)
 →教育大前駅下車、徒歩(約10分)

❖JR 博多駅からの場合
 鹿児島本線上り小倉方面普通電車に乗車
 (約50分)
 または、特急・快速に乗車し、赤間駅で普通
 電車に乗り換え(約30分~40分)
 →教育大前駅下車、徒歩(約10分)

※特急電車の場合、赤間駅を通過する場合
 がありますので、ご注意ください。

【福岡教育大学キャンパスマップ】



◇【全国大学書道学会会員書作展】

会期 9月20日(金)~9月22日(日) 9:00~18:00 (最終日は17:00まで)

会場 福岡教育大学 学生会館内大集会室

令和6年度 全国大学書道学会（福岡）大会

研究発表要旨集

令和6年9月21日（土） 於：福岡教育大学

研究発表 午前1—① 10:30 ~ 11:00

書表現セラピーの理論と展望

—芸術療法を起点として—

四国大学大学院文学研究科日本文学・書道文化専攻 高嶋良子

著者は香川県内の美術館で学芸員として勤務していた。作家たちはジャンルは違っても、目指すべき道は自己をみつめることであった。彼らは「自分がどれほどのものであるのか」を問いかけて、自己と自然との共存を試みることが制作の原点の一つであると感ずる。また、著者の書との出会いは十七年前である。何気なく始めた書であったが、書の奥深さに年々惹かれていったように思える。こうした中で、学芸員として、書をたしなむ者として、書は芸術であると捉え、他の芸術との社会的評価の違いについて疑問を持つようになった。

そこで、制作時に自己をみつめる機会が多い書芸術について検証を進め、そこから考えだされる新たな試みをセラピーという形で提示したいと考える。

研究を進めるうちに、自分をみつめるという作業は、様々な分野にまたがったツールを使用することで、カタルシスを得、内と外との関係性に気づき、それぞれが自分らしく生きることへの実践的な足がかりとなることを願うようになった。

本研究は、「書表現セラピー」と名付けたセラピーの理論の構築と展望について、四つのエビデンスの分析考察を基軸とし、書表現セラピーの理論を広げていくことを目的とする。書が持つ「人の心を癒す力」を実践的な書表現セラピーで考察していきたいと考える。

研究発表 午前1—② 11:05 ~ 11:35

昭和初期における上田桑鳩の芸術論と術語解釈

東京藝術大学 専門研究員 柳田 さやか

上田桑鳩は昭和初期に書道芸術社や奎星会を設立し、戦後は日展や毎日書道展、海外展等で活動した。前衛書の作家として論じられることが多く、その作品は戦後の書のモダニズムの胎動を示すと言及されている。

一方、戦前の上田の積極的な活動や理論も注目される。上田は昭和四年（一九二九）に比田井天来の門下に入り、同八年（一九三三）には早くも雑誌『書道芸術』と単著『初学臨池關鍵』を刊行する。当時の上田の芸術論に関しては、先行研究において「線」の捉え方、「構成」「構図」への関心の考察がなされてきた。ただし、上田がいかなる根拠によって書をどのような芸術であると論じてきたのかは更なる検討を要する。

そこで本発表では、上田桑鳩の昭和初期の著述を精読し、上田が書の術語をどのように解釈しているのかを検討することによって、その芸術論の特徴を考察する。上田は書が「対象物」を持たない文字を「素材」とし、「主観」「感情」を表現した「造形芸術」「線芸術」であると論じる。これらの術語や考えは西洋近代の美学に拠るものである。他方で、「線」「線條」は本来「点画」であると述べたり、「骨」「筋」を論じたりしており、東洋古来の術語や考えを重んじる傾向も見受けられる。本発表ではとりわけ、「主観」「感情」「筆意」に対する上田の解釈に着目することによって、上田が西洋近代の美学に依拠しながら書の芸術性を論じつつ、東洋古来の書論も取り入れてその論を補強していく特徴があることを考察したい。

「小島切齋宮女御集」の配列について

書文化研究会会員 染谷 慶子

1. 研究の意義

伝小野道風筆「小島切齋宮女御集」の同筆の書跡は現在までに68首確認されている。

『齋宮女御集』は村上天皇の女御徽子女王の私家集である。40本余りの伝本が確認でき、4系統に分類される、異同の多いものである。

本研究では「小島切」の断簡紙面に見られる付着した反転文字と、飛雲の配列に着目し、粘葉装であったことから鑑みて「小島切」の当初の配列の復元を試みた。

2. ねらい

「日本名筆選」(1994年 二玄社)以下「名筆選」と「古筆学大成」

(1989年 講談社)、「新編国歌大観」(1985年 角川書店)以下

「国歌大観」を用い、現時点での「小島切齋宮女御集」の状態を復元したい。

3. 研究方法

「名筆選」の付着文字を可能な限り読み解き、「名筆選」と「古筆学大成」との異同を確認する。異同を検証するに当たっては「小島切」と諸本の分類を参考にした。

4. おわりに

「名筆選」には詞書きも含め、計59か所の付着文字を確認した。

現物にはないが、歌番号の上では存在するものが3か所確認できた。

「名筆選」には確認できないが、九州国立博物館蔵に「いかてなほ…」(うすらひに…)の歌が書写されている断簡一葉がある。

王鐸の臨帖における脱字の発生傾向と要因に関する研究

東京学芸大学教職大学院 阿部ゆう

王鐸は、長条幅・卷子・扇面・冊頁等の多彩な形式の作品を遺している。

加茂奈々子は、黄道周や傅山に比べ、王鐸が多数の臨帖(法帖を臨書したもの)による作を遺しており、『淳化閣帖』の臨帖による作が多いことを指摘している。また、王鐸の長条幅形式の臨帖には、文字を脱字していることが指摘されているが、その発生傾向と要因は明確に示されていない。

本研究では、まず、加茂奈々子・橋口真子の研究を参考にしつつ、王鐸の長条幅形式の臨帖作における脱字の発生傾向を再分析した。そして、薛龍春著『王鐸年譜長編』により、制作年が特定できる長条幅の臨帖作と原帖を比較し、臨帖の際に改行の箇所が変わった場合、同じ言葉や文字が続いている場合に脱字が発生し、その脱字は晩年になるにつれ少なくなるということが分かった。また、書かれている内容や言葉によって意識的に脱字している場合もあり、複数の傾向が組み合わさっていることも分かった。

次に、脱字が発生する要因について、薛龍春は、①王鐸が使用した法帖拓本の種類や臨書の習慣に係っているもの、②「災傷語」(災害や不吉を意味する言葉)を避けたもの、③作品の形式が異なる原因によるもの、④多くの帖を混ぜて臨書したことによるもの、の四種の要因を指摘している。本研究では、薛龍春が指摘する四種の脱字が発生する要因に加え、各要因の統計的な数値の分析を行うとともに、複合的な要因の例について具体的に検討していきたい。

歴史家・陳垣の書道に対する所見の考察

―書作の態度と北京における立ち位置について―

相模女子大学 非常勤講師 早川桂央

陳垣（一八八〇～一九七一）は清末民初から中華人民共和国初期に活躍した歴史学者である。殊に中国宗教史と歴史文献学分野での功績が著名である。陳垣は多くの碑帖拓本を史料として用いており、また、その著作を見ると、自身の収蔵品に関する記載や書画に付した題跋、書家や収蔵家との交流の記録なども確認でき、書道に対して深い造詣を持っていた人物であったと推察される。しかしながら、歴史学者としての側面が強すぎたためか、陳垣と書道との関係性は未だ十分に顧みられていない。

本発表では陳垣の書道に対する所見の一端を説明すべく、陳垣の書作の態度と、活動拠点であった北京における立ち位置を考察していきたい。

先ず『陳垣文集』等の著作集と、『陳垣往来書信集』、『陳垣年譜配図長編』を用いて、陳垣の書作に対する態度を整理する。次いで鄒典飛『民国時期的北京書風』を参照し、当時の北京書道界の特徴を略述し、陳垣の書作態度と北京書道界の特徴との関連性を検討する。次いで『書信集』から陳垣の交友関係、交流内容を調査し、活動拠点の北京における立ち位置をより明瞭にしていく。

以上を明らかにすることは、碑帖拓本を用いた陳垣の研究業績に対する再評価につながると共に、当時の知識人の、書道に対する所見の一端を解明する一助にもなると考える。また啓功の師という立場を鑑みれば、陳垣と書道との関係性を一度考察してみることに価値はあると考える。

蘭亭序神龍半印本の再検討

―破筆などから推測する空罅の存在―

四国大学大学院文学研究科 馮 琳凱
四国大学書道文化学科教授 太田 剛

現在、日本や中国で最も多く学ばれている蘭亭序の手本は、「神龍半印本」（八柱第三本）と呼ばれる摸本で、馮承素という搨書の名人が、初唐の高宗の命令によって制作したとされる双鉤填墨本である。

他の有名な摸本や臨本に比べると、筆路が明確で、王羲之行書の入門教材として優れている。ところがここには、破筆・断筆・節筆などの表現や、不思議な結構が時折登場するので、初学者に臨書指導する際に詳細な説明が必要である。また行間が一定でないので、雑然とした印象も受ける。

四国大学大学院に中国から留学中の馮琳凱は、「蘭亭序諸版本の再検討」を修士論文のテーマとして研究中である。そのゼミ授業の中で指導者である太田剛と共に、神龍半印本を検討中、その破筆などの表現や点画配置から、原本と摸本の両方にヘラのようなもので付けられた多数の空罅の存在が推測できた。つまりは喪乱帖・二謝帖などに使用された「縦簾紙」に書かれていることが想定できるのである。しかし摸本に残存する空罅の痕跡が原本の線とは異なることが、この存在の場所をわかりにくくしている。

この罅の存在を意識して臨書することで、文字が表現しやすくなり、原本の揮毫過程や作者の意図も想像できるようになった。今まで不明だった特殊形態の点画・結構や墨痕の形成にも理由を見出せた。これは多くの書者にとって極めて有益な情報であろう。その詳細について具体的な画像を示しながら説明する。

博文堂関連書簡に見る山本二峯の收藏活動について

相模女子大学 准教授 下田 章平

本発表は近代書画碑帖收藏史研究の一環として行うものであり、特に收藏史上劃期をなす辛亥革命から第二次世界大戦終了時までの時期に活動した山本二峯（一八七〇—一九三七）の收藏について検討するものである。山本悌二郎「二峯」『澄懷堂書画目録』（文求堂、一九三二）には二峯の中国書画コレクション一一七六件が記載されるように、当時の書画碑帖收藏の代表格として挙げる事ができる。

博文堂は原田大観（二代目庄左衛門、一八五五—一九三八）が原田家の家督と庄左衛門の名跡を継承した書肆、出版社であり、明治四〇年代（一九〇七—一九一三）には美術書の出版や、日本を代表する書画碑帖を扱う美術商として活動し、山本二峯とも深い関係にあった。

発表者は、すでに関西大学図書館内藤文庫所蔵の内藤湖南宛山本二峯書簡を分析し、昭和初期における山本二峯の收藏活動について検討した。本稿では、これを踏まえた上で、近時発見された博文堂書簡を分析し、これまであまり明らかにされてこなかった、大正年間（一九一三—一九二六）における山本二峯の收藏活動について考察したいと考えている。このことにより、山本二峯や博文堂の收藏活動が明らかになるばかりでなく、中国書画碑帖の優品がいかにも日本へ流入し、コレクションが形成されたのか、といった、近代書画碑帖收藏史上の課題の解明につながるものと考えられる。

日本中世における年中行事「書き初め」の成立過程

鎌倉女子大学短期大学部 教授 杉山 勇人

「書き初め」は、新年を迎え改まった気持ちで文字を書く行為であり、文字を書くことに特別な意味が与えられている年中行事である。現代の生活文化のなかで、毛筆が用いられる数少ない機会の一つであり、とりわけ学校教育において伝統文化を支える行事として広く行われている。

多くの概説書において書き初めは、平安時代の「吉書奏」をその起源とし、江戸時代の寺子屋教育によって庶民に広まったとされている。しかし、吉書奏は形式的な文書である「吉書」を奏上する儀式であり、文字を書く行為は伴っていない。また、年始だけではなく讓位・改元等に行われてきた儀式であった。一方、江戸時代の「書き初め」は、宮廷・武家・庶民階級に共通し、年始めに文字を書く行事としてすでに普及していた。この行事内容の非連続性はこれまであまり問題視されていないが、要するに中世を境としてその内容に変化があったことが推測できるであろう。

そこで本研究では、書き初めの行事内容について、日本中世の年中行事書、儀礼書、日記等の記述から考察を試みた。その結果、吉書奏を継承する鎌倉時代の「吉書始」のほかにも、新年における「仕事始」の儀礼、宮廷の通過儀礼の一つである「手習始」、室町時代の禅林寺院における「元旦試筆」の習俗等、その成立に影響を与えた行事・習俗の存在が指摘できる。現在に続く年中行事としての書き初めは、このような複合的な要素の絡み合いによって行事内容が定着していったと考えられる。

近代における「撥鐙法」に対する解釈の変容

群馬大学 教授 永由 徳夫

「撥鐙法」は、唐・林蘊『撥鐙序』に初出し、後学によって「馬鐙説」「油燈説」を中心に議論された執筆法である。この「撥鐙法」が我が国に流入するや金科玉条の如くに信奉され、多くの書論で喧伝された。

近世において、「撥鐙法」は、さまざまに論じられつつも、「馬鐙説」が圧倒的に支持されていた。しかしながら、幕末に市河米庵が『米庵墨談』（一八二二刊）において「油燈説」を標榜すると、それまで主流であった「馬鐙説」は一蹴されてしまった。だが、米庵が「馬鐙説」を完全否定することで、「撥鐙法」自体の根幹が揺らぎ出してしまったことは、既に拙稿で指摘した。（近世の学書における「撥鐙法」の受容と展開『大学書道研究』第一七号、二〇二四）

近世において百家争鳴を成した「撥鐙法」は、近代に入ってどのように解釈されていったのであろうか。明治期に「撥鐙法」に関して詳述したものに、石川鴻齋の『書法詳解』（一八八五刊）がある。これは、「馬鐙説」「油燈説」のいずれにも拠らず、客観的に諸家の論を集成したものであるが、その前提となっているのは、当時の小字書法軽視への批判であった。

書道教育において大字書法が一般化していくことで、「撥鐙法」の立ち位置は変化を余儀なくされる。本発表では、『書法詳解』を中心に、近代において「撥鐙法」の解釈がどのように変容していったのか、その様相を明らかにしたい。

「童」字に関する考察

（珍簋銘文中の「童」字を例として）

九州女子大学 准教授 古木誠彦

本研究は、珍簋（西周時代中期に比定）銘文中の「童」字の用法に着目し、その特異性を究明し、同時代の「童」字の用法との相違について究明することが目的である。

珍簋は『商周青銅器銘文暨圖像集成』（『圖像集成』と略）上海古籍出版社（2012）に初出の青銅器である。青銅器の出土地は不明だが、拙稿『珍簋銘文小考』において、本器の器型式の検証には彭裕商氏が究明した分期断代法を援用し、紋様（瓦溝紋）に関しては、『圖像集成』の器影を検証、同紋様52器を確定し器型式・紋様の面から研究を行った。結果、陝西省・山西省出土の簋と同様の地域性を見出した。本論では、検証に至らなかった氏族図象と銘文中の「童」字の用法に特化することで、西周中期の中心地における漢字の変遷過程等を垣間見ることが可能ではないかと想定した。氏族図象に関しては、『商周青銅器氏族銘文研究』（何景成）を基本資料に、氏族図象の時代・地域性から、本器の氏族図象の意味を推察した。「童」字の検証に関しては、字形と字音の両面から研究を行い、その上で同時代の銘文定型に即して、「童」字の解釈を検証中である。字形に関しては、先賢の研究から、本器の「童」字形構成を検証した。さらに字音に拠る検証を試みている。字音に関しては、高本漢・王力・董同和・周法商・李方桂・落合淳思らの上古音研究を比較検証しながら、「童」字の上古音を推察し、別字の仮借として「童」字を使用した可能性がないか検証中である。

高野山大学文学部密教学科 教授 野田 悟

東洋の美を代表する表現に「書画」が存在する。特に中国ではその文字通り、古来より絵画と書法はお互い協力しあって生産され発展してきた。そこには分別することなく、それぞれを補完し合う密接な関係のもと、探求すべき美術領域であるとする。

周知のとおり書と画(畫)双方の文字には「聿(イツ)」が存在し、手で筆を持つ象形文字が含まれる。それらは文房四宝と言う共通する道具を使用し、「かく」という行為により、墨による線條の美を表現してきた。その中で中国の書画には「同源」にあると語られてきた共存する歴史があり、西洋美術とは異なる美の成り立ちが確立されている。

今回は、発表者の中国経験による中華思想の観点から書画の「同源」部分を大きく四つに分類し、掘り下げる。さらに東洋美術を考察する上で、そこから導かれる易学「陰陽思想」に立ち返る必要性を説き、西洋美術との違いをリサーチする。次に東洋文化の中核である書と他学問分野との陰陽対比を含め、現代社会における問題点を提示する。中国で「純美術」として形容される書画の表現性を認識し、我が国でも書を再度見直す時期に來ていると考える。

最後に今後更なる少子化が予想される今日、「書教育」を伸展させる一つのきっかけになることを切に願う。